

漁業経済 学会短信

No. 30
79.12

第二七回大会

シンポの準備状況

大海原 宏

(一)

第二七回大会シンポの準備は、六月発送の「事務局通信」によりシンポジウム・テーマに関する会員各位の御意見を伺うことからはじめました。そのべ切日である七月三〇日に在京理事会を開き、シンポ・テーマのつめを行ないました。この件に関して意見を寄せて下さったのは一人だけで、提案されたテーマは、①漁業制度の再検討、②沿岸漁業の再編成というものでした。

在京理事会では、この提案をふまえながら、①前回のシンポ『水産物流通論』において残された課題、価格論をふまえた集約をする必要があるのではないか、②漁場利用をめぐる新しい動向を漁業制度、漁場利用を漁協の役割などとの関連で検討してはどうか、さらには漁家の階層分解の新しいとらえ方を考える

必要があるのではないか、等々の論議がなされました。

このときは、結論が出ぬまま次回にもちこざれました。第三回目は、常任理事会での予備討論をふまえ、一〇月三〇日の在京理事会において討議を行いました。そこで、最終的にシンポジウムのテーマを『漁場利用の経済的諸問題』とし、主として北海道、東北地方において、顕在化している問題に焦点をしばって論議していくこととなりました。

(二)

ついでには、報告者とコメンテーターの決定（依頼）をすることとなり、早速何人かに報告依頼をしました。

現時点では、鈴木旭氏（北大）を中心とする研究グループを軸として、北海道におけるサケ定置網、ホタテ貝養殖、オホーツク沿岸のホタテ地まき養殖、に関して三人の方に報告して頂くことが内定しました。今後は北海道の研究グループ内で報告者と各自のテーマを決めて頂き、随時在京理事会とも連絡をとりな

がら推進していくことになっております。

コメンテーターは、第二八回シンポを同じテーマで、南西日本の問題を取りあげてはどうかとの意見もあることを考慮して、できるだけ早い機会に依頼するようにしたいと考えております。

以上で大会準備状況の報告を終わります。

◎第二回在京理事会（七月三十日）報告

一、新入会員の承認

広島大学 地井 昭夫
長崎県水産部 野中 健

二、会誌の編集について

第一回在京理事会の決定にもとづいて、会誌への投稿希望アンケート調査を実施したところ、十九名の回答が得られた。この結果を参考にしながら、今後の会誌編集を進めて行く。

三、第二七回大会のシンポジウム・テーマについて

① シンポジウム・テーマに関して、会員各位の意見聴取を行ったが、回答は一件のみであり、提案テーマは、「漁業制度の再検討」、「沿岸漁業の再編成」であった。

② シンポジウム・テーマについて討議その過程で「水産物流通問題のなかで

残されている価格論」、「漁業制度論」

「漁場利用をめぐる諸問題」、「地代の問題」等種々討議を行ったが決定するに至らなかった。当日の議論をふまえて、常任理事会でまとめ、再度在京理事会で討議決定することとした。

四、学会賞選考規定について

全国理事会の要請を受けて、学会賞選考規定を検討し、次回の総会にかけるよう規定案を作製した。

五、投稿規定について

同じく全国理事会の要請により、投稿規定の見直しを行ない、別掲のように決定した。

なお、この投稿規定は、現在編集作業が進行中の会誌の投稿から適用することとなり、取敢ず執筆者には、郵送することにした。

六、学会議学術用語小委員会から要請

現在、学術用語小委員会で用語の統一作業が進められており、三名程度の協力要請があった。本学会では、平沢豊、中井昭両氏が対応することになった。

別掲執筆要領

一、二〇〇字詰または四〇〇字詰原稿用紙、ペン書き、縦書き、新かな使い、当用漢字をもって執筆のこと（横書き、鉛筆書き、原稿をコピーしたもの、判読困難な原稿は

不可）。

二、枚数は原則として四〇〇字詰四〇枚以内（図表をふくむ）。分載も可（二回まで、約八〇枚）。

三、魚介藻類の名前は片かなを用い（引用文献は別）、漁業種類の表記は農林統計に準ずる。

四、数字は、「二一人、三三〇トン、

一三、四五六円」のようにし、その間に十、百、千、万などは入れない。ただし「十五万円」「三〇億円」のようにそれで終る場合は万、億を用いてもよい。

五、注は該当箇所の右横行間に①、②と挿入し、末尾に一括してまとめる。

六、英文タイトルを附し、外国文献を引用する場合には書名、雑誌名に下線を引く。

七、図表は別紙に書く。図は一論文（約四〇枚）三図以内、これをこえる場合は執筆者が作図費用（一図七千円見当）を負担する。なお、自ら作図を行う場合は、写真印刷が可能な程度にまで仕上げることをする。

八、一七の注意を守っていない原稿は受理せず、返却する。

九、受理した原稿は編集委員会で検討し、再投稿をもとめることがある。

◎第三回在京理事会（十月三十日）報告

一、会誌発行に関する基本方針について

① 会誌の発行は、定期刊行を目差すことを再確認。

② そのため、最低限論文三篇が集まったところで印刷する。

③ また、論文が、投稿予定者より期日以内に提出されなかった場合には、次号掲載とすることもありうる。

二、昭和五三年シンポジウム特集号の取扱いについて、

五三年シンポジウム「水産物の流通機構」

特集号は、原稿が集まらないため発行できない状態である。そこで、その取扱について検討した結果、次のようにすることとした。

① シンポジウム特集号としては、刊行しない。

② ただし、原稿が集まり次第各号に載せる。なお、原稿集めは、中井昭氏が行う。

三、第二七回大会のシンポジウムテーマ

第二七回大会のシンポジウムテーマは、数回にわたって理事会で検討した結果、「漁場利用の経済的諸問題」と決定。報告者は、二野瓶、鈴木（旭）、増田、小沼、各氏にお願いすることになった。目下各氏と交渉中。

四、ボーナスカンパについて

ボーナスカンパは、例年通り行うことになった。

五、会誌の文部省刊行助成金の申請について

常任理事会において、会誌の発行に際して、文部省刊行助成金の申請を行うよう手続を進めたが、会誌に少くとも欧文の抄録が必要であり、作業を中止した。

◎ 各地の研究会だより (第一回)

漁業問題研究会

この研究会は、昭和四四年十二月に始まり、早や十年間活動を続けている。発足当時の趣意書を組解いてみると、研究会の目的が次のように書かれている。「この研究会は、それぞれの研究者が、自分の問題意識、方法を自己の具体的な研究実践との関連で発表しあうことにより、漁業経済研究の発展に寄与するとともに、若い研究者の急速な成長を計ることを目的とする。」

発足当時は、全国的な組織のもとに、年一回の研究発表会が行われていたが、その後、こうした全国例会(年一回)に加えて、各地に例会がもたれるようになった。現在でも、八月を除く月一回の東京例会、あるいは北海道の例会が引続いて開かれている。最近の活

動を紹介すると、五月に全国例会(漁業経済学会の際に開催)が開かれ、八木庸男氏の「漁家経営論」の合評会が行われた。月々の東京例会は、全漁連の会議室(場所を変更することもあるが)で開催されており、ここ数ヶ月のテーマをあげると次のようである。

六月 最近の食生活の動向について

高木和男氏

(労働科学研究所)

七月 漁業白書について

田口絹子氏他

(漁船海難遺児育英会)

九月 漁業制度改革をめぐって

高橋泰彦氏

(全国栽培漁業協会)

十月 漁場地代論について

堀口健二氏

(東京農大)

十一月 映画観賞

琵琶湖のエリ漁業、津軽石川のサケ漁業、ザ・サカナマン、男達の海

全国的には、七十数名の会員で組織され、東京例会も、毎回十数名の出席者を維持して活動しており、今後ともより一層研究会を充実させようと考えています。東京と云わず地方の方々もぜひ参加を希望します。

最後に、この研究会が、いままで続けられたのは、多数の方々の力添えあったためであり、この場をかりて謝意を表します。

(漁業問題研究会事務局)

◎ 大会準備担当理事より

第二七回大会の個別報告の募集については、シンポジウム・テーマにつきましては、在京理事会で決定をみましたが、加えて、個別報告についても、会員各位の多数の参加を希望しております。事務局あてご一報下さい。

◎ 学会短信編集理事より

学会短信は、単に学会事務局より、会員各位への一方通行の情報だけでなく、会員相互間の情報交換の場としての機能も担っていると思います。会員各位の短信への投稿もお願いします。



◎ 新刊書紹介

悲しみの海

いま漁船海難遺族は――

斉藤 実著

「海難事故」それは私達にとって反日常的な事に思われるが、しかし、浜では、日常的に悲劇がくりかえされる。

そして、この事故がもたらす悲劇は、ほかならぬ残された遺族に集中する。だが、これまでの漁業は、この問題を常に後回しにし、ひいては忘れ去ってきた。

海難遺族は、型ばかりの福祉施策の中で母と子が肩を寄せ合い、父の受けた波以上の厳しい荒波に耐え必死に生ようとしている。

著者は、熱く海難事故の悲劇と遺族の生活を語り、理解と援助・協力を訴えている。また、海難遺児を励まそうとできた財団法人漁船海難遺児育英会は、設立十年を迎えようとしているが、いまだ基金が不十分であり、本書の売り上げ金の一部は、海文堂出版の御好意で基金造成に役かうことになっている。

本書は、海難事故問題に取り組んだ希少な書であり、多くの人々には是非一読してほしい本である。

(漁船海難遺児育英会 手島・田口)

海文堂出版 千円

漁業経済研究 第25巻1号

(論文)

水産物消費・需要変化の要因
水産物の需要動向と漁業構造
におよぼす影響

長谷川 彰
平 沢 豊

倉 田 亨
福屋 敬宣

未 定
未 定

水産物需要・消費研究をめぐる若干の問題点
――第26回大会シンポジウムに寄せて――

吉木 武一

(書評)

八木庸夫著「漁家経営論」
石田好教著「日本漁民史」
(55年2月刊行予定)

浦城 晋一
二野瓶徳史

「漁業経済研究」バックナンバー在庫案内

漁業経済研究	14巻	3号	300円	漁業経済研究	19巻	3号	600円
漁業経済研究	〃	4号	300円	漁業経済研究	〃	4号	600円
漁業経済研究	15巻	1号	400円	漁業経済研究	20巻	1号	600円
漁業経済研究	〃	2号	400円	漁業経済研究	〃	2号	600円
漁業経済研究	〃	3,4合併号	800円	漁業経済研究	〃	3,4合併号	800円
漁業経済研究	16巻	1号	400円	漁業経済研究	21巻	1号	800円
漁業経済研究	〃	2号	400円	漁業経済研究	〃	2号	800円
漁業経済研究	〃	3号	400円	漁業経済研究	〃	3,4合併号	1,500円
漁業経済研究	〃	4号	400円	漁業経済研究	22巻	1号	1,000円
漁業経済研究	17巻	1号	400円	漁業経済研究	〃	2号	1,000円
漁業経済研究	〃	2号	400円	漁業経済研究	〃	3,4合併号	1,500円
漁業経済研究	〃	3,4合併号	400円	漁業経済研究	23巻	1号	1,000円
漁業経済研究	18巻	1,2合併号	1,000円	漁業経済研究	〃	2号	1,000円
漁業経済研究	〃	3号	500円	漁業経済研究	24巻	1号	1,000円
漁業経済研究	〃	4号	500円	漁業経済研究	〃	2号	1,000円
漁業経済研究	19巻	1,2合併号	800円	漁業経済研究	3,4合併号	1,500円	